

資料収集ということ

寺田寅彦の随筆の中に「科学者とあたま」と題する一編がある（昭和八年十月、「鉄塔」、寺田寅彦全集 第四巻）。

「私に親しい或る老科学者が或る日私に次のやうなことを語って聞かせた。

『科学者になるには「あたま」がよくなくてはいけない』此れは普通世人の口にする一つの命題である。此れは或る意味では本當だと思はれる。併し、一方で又『科学者はあたまが悪くなくてはいけない』といふ命題も、或る意味では矢張り本當である。そうして此の後の方の命題は、其れを指摘し解説する人が比較的少数である。』

……中略……

「所謂頭のいゝ人は、云はゞ脚の早い旅人のやうなものである。人より先きに人の未だ行かない處へ行き着くことも出来る代りに、途中の道傍或は一寸した脇道にある肝心なものを見落す恐れがある。頭の悪い人脚ののろい人がずっと後からおくられて来て訳もなく其の大事な宝物を拾って行く場合がある。」

……中略……

「頭のいゝ学者は又、何か思ひ付いた仕事があつた場合にでも、其

佐々木 剛 三

の仕事が結果の価値といふ点から見ると折角骨を折つても結局大した重要なものになりさうもないといふ見込をつけて着手しないで終る場合が多い。併し頭の悪い学者はそんな見込が立たない為、人からは極めてつまらないと思はれる事でも何でも我武者らに仕事に取付けて脇目もふらずに進行して行く。さうして居るうちに、初めには予期しなかつたやうな重大な結果に打つかる機会も決して少くはない。」

……後略……

はじめてこの随筆を読んだのはもう三十何年も前のことで、その時にはたゞ、「はゝあ、そんなものかな」と読み過してしまつたのだつたが、今、讀み返して見ると、「成程々々」と思うこともあるし、又、「やっぱり自然科学と人文科学、とくに歴史などの分野のことゝは違ふのだな」と思つたり、色々と考えさせられることが多い。

しかし、自然科学と人文科学の違いと言つても、たゞ漠然とした感じだけのことで、何となく違和感めいたものが頭の中をスツと通つて行つた、と言う位で、あゝだ、こうだ、と言うような議論になる程に深刻なことではない。たゞ自然科学の場合に間々見られるよ

うな、何か一発直観と言うような、如何にも天才的な研究のあり方は人文科学にはないようであるし、また自然科学の「結果の価値」と言うことを、人文科学では研究のはじめから考えると言うようなことはあまりないことで、こつ／＼と丹念に資料を蓄積して行つて、最後に結果が出て来るような歴史の研究のあり方についての感想が、この随筆に書かれていないことに対する不満のような気持を持つたに過ぎない。自然科学者であつた寺田寅彦に人文科学の研究についての随筆を求めるのは、木によつて魚を求めるの類いのことであることは十分に承知はしているものゝ、やはりあれだけの大随筆家であるのだから、もう少し人文科学の領域のことについても配慮が欲しかつたと思うのみである。

と言つて、何も私が寅彦にかわつて人文科学の、とくに歴史学の、研究についての感想や考えがある訳ではない。たゞ少し、資料を集めると言う仕事に従事しているので、それなりの感想はある。しかし、それはどこまでも歴史学の分野のことで自然科学については皆目見当もつかないことである。従つてその感想というものも極めて限定された、狭い範囲のことであることも当然であろう。たゞ少しばかり、やはり寺田寅彦の説く所と違つていゝるな、と自分では思ひたいのである。

もう三十数年も前のことになる（昭和三十年）が、京都の清涼寺の本尊釈迦立像の胎内から多量の納入物が発見された。発見された物の重要性に鑑み早速に「清涼寺釈迦胎内納入物研究会」が組織され、それら新発見のものゝ研究がはじめられた。その時、ついでに、と言つては少し違ふけれども、本体の釈迦像自身の研究も、と言う

ことになつて、丁度その頃、この清涼寺釈迦像や教王護国寺の兜跋毘沙門天像など、平安時代に舶載されて来た中国の佛像に興味を寄せていた私にも、この研究会に参加するように、と言う話があり私も参加させて置くことになつたのである。

所で、この釈迦像に興味を寄せていたとは言ふものゝ、私はその時まで碌にこの像を拝したことはなかつた。当時、この像は秘佛として普通では「御身拭い式」の時ぐらいにしか拝見することは出来なかつたのである。一度、学生時代に、時の住職、故塚本善隆博士（元京大人文科学研究所長、元京都国立博物館長）にお願ひして、特別に拝観を許されたのであつたが、その條件として、朝、七時に寺へ来い、との事であつた。それは、その時間を過ぎると朝参りの信者が来て、ゆつくりと拝めないから、と言う故博士の御恩情から出たことであつた。それで、ともかくも朝七時に寺へ参上した所、もう既に十人近い信者が本堂外陣に陣取つて朝参りの最中であつた。故博士は、挨拶をする信者たちに会釈を返されつゝ堂奥へ進まれ読経をすまされて開扉して下さつた。もつと前へ来てよく見る様に、との御言葉で須弥壇と供物台の間まで進んで拝見することが出来たのだが、その時、故博士は信者たちに、さあ貴方がたも中に入つて拝みなさい、と声を掛けられたのである。

それまで外陣で拜んでいた人々がその御声掛りで内陣へ進み、再び拜み始めたのであつたが、それからが大変なことになつた。いつもは入れない内陣で拜めたことに感激したのか、釈迦像に一層近付いたことに感動したのか、それまでは各自が小声でつぶやくように唱えていた稱名の声が段々大きくなり、やがて大合唱となり、ふと見ると、五体投地というか何というか、上体を上下に動かして頭を

疊に着くまで折りまげてのお祈りの最高潮で、中には大声を上げて泣く人もあって、いつ終るか分らないような様子であった。朝早く、他には人一人とていない大本堂の中で、妙に声高に響く稱名の大合唱を背中にしては、そう冷静に拜見している訳には行かない。這々の体で逃げだしたのであるが、そんな事で私はそれまで十分にこの釈迦像を拜見したことはなかったのである。

だからこの釈迦像の研究会に加入をすすめられた時は、まさに天にも登る心地がした。と言ったら少し大袈裟であろうが、ともかくそんな気持になったのは事実である。あの像を見ることができ、というのがそのような気持になった最大の理由であった。ところがそうは喜んでばかりいる訳にはいかないことが分つて来て、そのお誘いを断ろうかとも思った。はじめ、その研究会はせいぜい博物館内部の人だけ位でやるのかと思っていたら、なんと全日本の規模のものであることを知らされ、吃驚したからである。しかし、それはともかく、無事に研究会の一員として、やはり釈迦像本体の日本への伝播の研究を担当された故毛利久博士（当時、京都国立博物館資料室長、後、神戸大学教授）のお伴をして、本堂の後に我々の研究の爲に假安置された釈迦像と対面することができたのである。

御厨子から出されて、いわば白日の下に長年のあこがれの対象であった釈迦像を拜見して何とも言えぬ感慨に打たれたのであったが、よく見ている内に不思議なものが目についた。像の表面や裏面には毎年の御身拭いの故にか綺麗に木地が出ていて、表面は投銭の爲に着いたと思われる傷跡が一面に残っているのが目立つ他は別に何と言うこともない。ただ衣の襷の、御身拭いの時に布巾の当らないような深い部分に截金が施されているのが見えた。当時の常識で

は截金は日本独特の技術で、まさか中国にある筈がない。これはキツト、後に快慶が修理した際に施したものであるうかとも考えた。しかし、もっとよく見てみると、快慶の時代——鎌倉時代——の佛像に施されている截金とは違って、その幅に不整があつて稍々無神経な施し方ながら、その図様は本体の衣文から発したような枝分れした小衣文であることが分つた。しかもその形式は中央アジアのキジュールで発見された壁画に見るのと同じではないか。この釈迦像の全体の像容はすっかり中央アジアから離れて中国化し、像としての完成度も非常に高く、完全に宋時代の佛像になり切っているのに、このような陰の部分には脈々として祖先からの伝統が残されていたのである。

この截金の衣文を見た目でもう一度像を見直すと、この時代——十世紀——の佛像としては先づは当り前のことと考えて別に重要な問題はあるまいとしていた、眼の瞳の部分に嵌入してある鑛物質の玉のことが妙に気にかかった。後世よく行われた玉眼の法と違い瞳だけと言う点で変わっていると行われれば変わっているが、観智院の大虚空藏菩薩や宝菩提院の菩薩半跏像の目にも同様なものが見られ、さらには雲崗石窟の大佛にもある、いわば中国でも日本でも行われていたものなのである。ところがこの釈迦像のそれは、それまでに私の知っていた諸例と少し違うのである。片方の瞳が一時はずれてそれを慌てて素人が前後逆にくっつけたようになっていて、これは別として、例えば広隆寺の多聞天像のように、黒耀石で瞳孔全部を埋めたようなのと違って大変に小さく、かつ材質も何か別物のような気がするのである。一体これはどう言うものだろうと気を取られている内にその日の調査を終えてしまったのであるが、その間

にとんでもない失敗をしていたことに後で気が付いたのである。

実はこの時、この像の必要部分の撮影を便利堂写真部に頼んであって私たちも便利堂の人々と一緒に行ったのであるが、全体像の写真を撮り、台座の写真も撮り、面貌も、とくに目の部分や截金の部分なども撮って大体においてこれで満足と思っていたのであったが、その時撮るべき写真としては、快慶が修理の時に作り加えた台座の蓮肉の部分はずして、佛像が直接に反花座の上に立った写真であったのである。大分後になってから、あの時、この写真を取っておいたら、と随分後悔したものである。反花座の上に直接立った姿、これがこの釈迦像の原型であって、現在のお姿は快慶が作ったものだったのである。故毛利博士もその点、随分悔んでおられて、その時たまたま手持ちのカメラで一枚だけお撮りになったその釈迦像の写真——チョットぼけた手札型の——を「この写真一枚ですからね」と大切にしておられたことを思い出す。

そうこうしている内に研究会では多くの人々が各自の分野の研究を発表して行った。それらの研究の中で私がつとも驚いたのは小原二郎博士（千葉大学教授）の材質の研究であった。

小原博士の研究によると、本体（快慶の補修かとも一時考えられていた両手先も含む）と光背の中心部分、それに反花座だけが、快慶が附加えた光背の周囲や蓮肉部分の桧材とは違って、中国奥地に産する魏氏櫻桃で作られているというのである。しかも、魏氏櫻桃材で作られた佛像としては、日本では他に教王護国寺の兜跋毘沙門天像だけである、というお話である（その後、同材で作られた佛像は他にあることが同博士の研究で判明している）。先きに反花座の上に直接立った姿の写真を撮り損ねたこともショックの一つであったが、それ以上にこ

の釈迦像と兜跋毘沙門が同じ材で作られていたということには強烈なショックを受けた。

もと／＼興味を寄せていた両像ではあったけれども、この両像は一は唐時代の製作、一は宋時代の製作とその製作時代も別ならその形式も全然違っていて、その間にまさか材質を同じくするというような共通点があるなどということは思いも寄らなかつた。ところがその材質は同じだという。材質が同じということであれば日本の佛像には平安時代初期のものも室町時代のものも同じ桧で作られたものが多い。そして同じ桧で作られたと言っても桧製の佛像相互の間に何らかの関係があるものとしてよいとは考えられない。しかし、何千、何万という程に数多く作られたであろう中国の唐宋時代の佛像のうち、一体、どの位の佛像が日本へ舶載されたのであろうか。そして、それら舶載された佛像の内、私が興味を寄せた二体のこの両像が、よりによって中国奥地産の魏氏櫻桃で作られているのである。唐宋の両時代という時代差を乗りこえて、きつと何かあると私は思った。

そんなことで、兜跋毘沙門像を調べにかゝったのだが、この像に關しては既に松本文三郎博士の「兜跋毘沙門放」（佛敎史雜考所收）という文献の上では委曲を盡した名論や、源豊宗博士の「兜跋毘沙門天像の起源」（佛敎美術第十五冊所收）というような像の様・形式の起源を追求されたものがあり、いわば研究しつくされたような感があつた。私としては、このお二人の論文の拾い残された残り物をこつ／＼と集めて行く外はない。ところが先づ最初に兜跋毘沙門天の写真に精密に観察していて気がついたのは、その瞳に何か詰物が詰められていることであつた。よく見ると、像の本体だけでなく、像を両手

で支えている堅牢地神や邪鬼の目も同様で、しかもその詰め方は、日本の他の像のそれとは違い、目の中心部に小さく、それこそ瞳ぐらいの大きさの清涼寺釈迦像とまったく同じものであった。やはりこれは何か関係がある、と自信を持つことができたが、しかし、それから後は兜跋毘沙門天像と清涼寺釈迦像の關係の密接さを裏付けるものは何も出てこない。兜跋毘沙門の起源が中央アジアにあることは既に源博士によって證明されているし、清涼寺釈迦像の方も、截金の衣文から考えて中央アジアに關係のあることはハッキリして、その点、この両者がその淵源のどこかで繋りがあることも事実である。そう思いつくも次の展開がなくて、私のはじめの意気込みもいつしかどこかへ消えて行った。そしてこの両像に対する調べも一頓挫したまゝ途方にくれて、むしろこの両像にはあまり關係のありそうにない、と言つても全然關係がない訳ではない私の守備範囲には属する書物を手当り次第に読み、また読み返すということになったのである。

その頃、京都国立博物館の書蹟關係は美術室長の島田修二郎先生（プリンストン大学名譽教授）が担当しておられた。先生は月一回の常時の陳列替えに当つても普通であれば館の所蔵品——といつても当時は館の所蔵品などは殆んど無く多くの社寺からの寄託品であつた——で間に合う所を、その所蔵品に何らかの不滿か不足があればたとえ一点でもその一月の陳列の為に他から新しく借りて来て陳列されるという慎重さであつた。それが何時のことであつたか、あるいは今いつたような常時陳列であつたか特別陳列であつたか、それからその陳列の為に特別に借り出されたものであつたかどうか、今では思い出すことが出来ないけれども、陳列の手伝いをしていてケ-

スに高山寺「冥報記（巻中）」を拵げていた時、目に飛び込んで来た文字があつた。隋の国子祭酒蕭環の甥、詮が発見した佛像に関する記事の中に

「製作異於中国、面形似胡、其眼精以銀為之」とあるのがそうであつた。全く突然のことであつた。

これだ、と私は思った。あの釈迦像の目、兜跋毘沙門の目は瞳にだけ何かを入れているのである。そしてそれは決して黒耀石のような石ではない。そして、あの釈迦像の目は一度抜け落ちたものを逆にして填め込んでいる、普通の練物などではそうは行かない、きつと銀だ、と考えた。それでこそ、この両像を關係づけられる、という訳である。

それは私の資料探しということとは全く別の、思いもよらない偶然から見つけたものだった。その偶然という一種の神秘性に酔つたものか、私は大得意であつた。で、早速、釈迦像研究会に報告したのだが、故塚本博士に、佛教学に於ける「胡」と「梵」との概念についての説明を受けて自分の浅学を思い知らされ、また、島田先生はその後も相変らず釈迦像の目の詰物を「練物」と言い續けられて、私の報告は報告ともならぬ結果に終つてしまつて、私としては折角の発見と思つていたものが急に色あせてしまつたように私自身にも思われた。そしてその思いはやはり今から考えて見て誤つていないと考えられる。しかし当時はこの眼精は銀、ということに未練があつたのであろう、その後しばらくしてから書いた私の論文（兜跋毘沙門天像についての一考察「美術史三八号」）には、冥報記の記事を注として引用している。今では私の若かりし頃の一つの記念という訳である。

こんな事をしてる間にもポツポツと資料集めとも言えない資料集め、すなわち直接的と思われる史料には仲々当る気がせず周辺の史料を何も私の期待するような資料が出るものと考えずに読んでいた。そんな目的なしの読書の時つい手を出すのは、やはり学生時代から一番興味を持っていた中央アジア関係の本である。しかし今回の読書は何と言っても以前の読書とは違っている。と言うのは、以前であれば何気なく読み進んでしまうところを、今回は一々頭の中の釈迦像や兜跋毘沙門の像容を思い起してこれらの像と何處か引つ掛りがないかと考え考えて読んでいくことである。それだけではない。一つの記事を読むと、むしろその記事がこれらの像についての何を何か表現を替えて書かれているのではないかという一種の邪推というか妄想というか変な考えにとりつかれるようになってしまっていた。現在ならば容易に入手できる日本語訳もあつて、その日本語を読んでいる限りはこのような読み方をする筈はないけれども、当時はこの日本語訳というのがなく、ともかく漢文であつたので何分にも自国語の本を読むような訳に行かなかつた。それでも毎日この妄想と闘いながら本を読んでいた。

そんな頃、「大唐西域記」を読んで見た。もちろんこの本は前にも読んでいて、玄奘がパミール越えをした時の描写に文学的な感動を覚えたことがあり、きつと無意識的に自分自身を中央アジアに置いて見ようとしたのかも知れない。しかし読む速さは相変らずのろのろとしたものである。そしてそれが返ってよかつたのである。開巻第一頁ではないが第一巻の迦畢試国の條に出てくる沙落迦寺の記事を読んでびつくりした。その寺にある神王像の冠の中に鸚鵡の像があつて、賊が攻めて来た時その鸚鵡像が羽ばたいて賊を驚かせたと

いうのである。

「神王冠中、鸚鵡鳥像、乃奮羽驚鳴、他爲震動、王及軍人、辟易僵仆、久而得起、謝咎以帰、」

その冠中に鳥像を持つ像などめつたにあるものではなく、管見の限りでは兜跋毘沙門天像だけである。しかも、迦畢試国というのはこの毘沙門の故地とされる和闐とはパミール高原をへだて、お隣のアフガニスタンの中心部にある国ではないか。きつとこれは関係がある、とは睨んだものゝ、前の「眼精以銀爲之」の轍を踏むまいと思つて今回は慎重であつた。同じ「大唐西域記」の巻一の縛喝国の條にも、これは神王像ではなくて毘沙門像の靈驗についての記事があり、いづれも襲来してきた敵を破るという点で、「宋高僧傳」巻第一の不空の條の西涼府毘沙門と同性質の説話である。そうして念の爲にと思つて當つて見た「大慈恩寺三藏法師傳」（巻第二）には、迦畢試国の沙落迦寺を訪問した玄奘がこの神王像の下を掘つて、言い伝え通り中から宝物を取り出した、とこれは説話ではなく事実が記されていたのである。

この一連の資料を見付けたのは、前のような偶然からではなく、と言つて関連史料を狙つてのことでもなく、考えて見れば、唐時代の中央アジア研究にとつては「大唐西域記」や「大慈恩寺三藏法師傳」のような第一級の史料の中からであり、いわば当然のことであつたのかも知れないが、しかしこれは大変に幸運なことであつた。これも後から反省したことであるが、第一級の史料というものを、我々は非常に尊重するのが常であるが、その反面、一度目を通したとなると何となく安心してしまい仲々読み返すようなことをしない。はじめに読んだ時に気の附いたことを一々カードに書いておく

とかノートして置くのは史料を扱う者の常識であって、現に私も「大唐西域記」の場合にはノートを取っていたのであるけれども、兜跋毘沙門を意識する以前には「神王像」も「鸚鵡鳥像」も私の意識の中に入っていない、多分佛教関係とは無関係のものとして読み過ぎていたであろう、残念ながら私の「大唐西域記」のノートからは洩れていたのである。

資料集めが一段落して、私が、資料というものは集まりはじめるとどん／＼勝手に向うから集まってくるものだ、と感想を洩らしたら、故毛利博士が、そうだ／＼と相槌を打って、いゝ研究をしている時はそうだが、そういう資料の集まり方がしない時の研究は駄目なものだ、とつけ加えられたことを昨日のことにように思い出す。

その後私は東京へ移ったのであるが、京都に居た頃の、右を向いても左を向いても研究材料が転っているという訳でなく、また日本美術をやるようにとの話もあって、しばらくの間は何もする気がせず、また何もしなかった。今度は「源氏物語」や「栄花物語」を読んでノートを取って暮っていた。そして、やるならこの辺の時代のもものが面白そうだな、と思い、同時にその対象とすべきものが非常に少ないのに閉口していた。

その内にいつの間にか歓喜光寺本「一遍上人絵伝」に興味を持つようになつていた。高僧の宗教人としての伝記というだけではなしに、それ以外にも垂迹曼荼羅の集成であるとか歌人一遍伝であるとか二重三重のイメージがこの一本の中に混在している点に魅かれたのである。その垂迹曼荼羅的要素については別として、歌人伝でもあることを示すものは、先づ収載された一遍上人の歌の数の多いこ

とである。歌といっても純粹な和歌でなく所謂釈教歌ではあるが、ともかく五十首の多きにのぼる。収載歌数の多いこと、歌人伝にとつてはそれが何より重要なことであるし、またこれは誰にでも納得できよう。次に、第五卷第二段の小野寺の俄雨の景である。下野国小野寺で俄雨にあい、尼法師が雨宿りに寺の門へ駈け込み袈裟衣をぬぐのを見て和歌を詠んだ、というまったく何の変哲もない情景が、全十二卷四十八段という複雑な構成の絵巻の中に、他にも書くべきこともあつたらうにと思われるにも拘らず取上げられていて、これも歌人伝として見れば納得できることであると考えた。そしてこのことについては、昭和四十三年三月号の「国華」に論文として載せてもらったのであつた。

その後この問題からは離れてしまつて半ば忘れたような状態であつた。そしてまったく別の主題の方へ興味の対象も移り、こんな論文を書いたというのもすべて過去のことになり果てゝいたのであつた。

ところが最近になつて西行法師——といつても「西行物語絵巻」ではない——に魅かれ、西行の和歌をはじめ伝記や周辺の本を読む機会が自然と多くなつてきた。そういう本の中の一冊に、松本寧至著「中世宮廷女性の日記」（中央公論社刊）というのがあつた。副題を「とはすがたりの世界」というこの本は、「とはすがたり」の作者、二條の伝記であるが、その中に、正応四年（一二九二）四月、二條は伊勢にお詣りし、

「さらに神宮から離れた観音堂の尼に宿を借りようとして、はじめは断わられた。しかし、

世を厭ふ同じ袂の墨染をいかなる色と思ひ捨つらん

と歌を詠んでやると、宿を貸してくれたという。これも西行が天王寺詣の際、にわか雨が降ってきて、江口の遊女妙に宿を借りようとして断わられた故事を思い合わせることができる。こゝにも女西行の面目が出ている。」

という数行（一八〇頁）があった。これを読んで愕然とした。

僧が俄雨にあつて附近の寺か何かに雨宿りを求める、というパターンは「一遍上人絵伝」の小野寺の俄雨の情景と同じではないか。二條、一遍と皆が同じような軌跡を描いた行動の意味するものは、最初の行動者、西行の詩的であつたことに感銘した後人が、その行動をとることによつて自らを詩人になぞらえようとしたと言ふことではないか。一遍の場合は、一遍自身がどのように思つていふことも、その弟子で伝記作者でもあつた聖戒が一遍の一行の行動を見て西行を思い出し、何等かの意図で一遍を西行になぞらえようとしたのであろう。現代人の目から見ると少々小供っぽいとも見える思考過程ではあるが、ある行動をとるべく規範となるようにするためにはその典型が必要である。しかし典型を求めようにも同時代にはそれらしいものが少なく、たま／＼有名であつた西行の行動に歌人の典型を見出すや一気にそれに傾倒しようとした、暗い情熱と頑固さを十二分に持つていた鎌倉人の行動として、我々は認めることができよう。この場合、確かに一遍の行動は西行の行動と同じであつた。それまでの、五十首の和歌を収載した歌人らしき行動を描くことにより、その歌人としての存在を強調していると見ていたものが、疑似西行を描いたと言ふことになれば、これは明らかに歌人一遍上人の伝であることができよう。

しかし、あまりにも気付くのが遅すぎたのである。もう二十何年

か前にこの事に気付いておれば、あの「一遍上人絵伝」に関する論文もいまま少しは堅固なものに仕上げることができたであろう。が、いくら悔んでも返らないことである。と言つて、たったこれだけのことを今更こと改めて一編のものとしてまとめることもならず、いわば宙に浮いた形である。そして、今となつてはどうしようもない一番はじめの資料収集の不備について思うのは、どうしてもっと広く時間をかけて、資料を集めなかつたかということである。といつて、必要にして充分な資料を集めようとすればすべての史料について当ることが要求される訳で、これはまったく不可能なことゝいつてよく、問題はどの辺で資料収集を十分と見て打ち切るかということである。その打ち切り時を誤ると私のしたように後から新しい資料が出てきてどうしようもないことになるし、資料収集をいつまでも続けると自分の考えをまとめることがいつまで経つてもできないことになる。この辺の見極めこそ大切だと思うのであるが、この見極めの時期を他の人はどのようにつけているのだろうか。

資料の取扱い方や収集の仕方についての失敗ということであれば、私には本当に数多くの失敗例がある。そしてそういう失敗にまで行かず、二・三の資料を抱えたまゝどうしようもなく、と言ふことは論文にもまとめられず、と言つて忘れ去ることもできずにいるという状態にあるものもまた数多くある。こういうどうしようもない資料はどのように処理すればよいのであろうか。しかしこのような現象はどうも中世もしくは中世以前のことには於いて認められるやうで、近世以降は違つた形になるやうに考えられる。この辺に、歴史研究と一口に言つても一筋縄で行かない面白さがあるやうであ

る。それはともかく、やはり歴史の世界にも「あたま」のよい研究者と「あたま」が悪い研究者があつて、私などのように後者に属する者には前者の世界のことは理解できないのかも知れないし、また「結果の価値」について考えることもなくただ暗雲に資料を集めているというだけのことであるのかも知れない。

こういう風に考えると、自然科学も歴史学も結局は同じことになるのかも知れず、だとすると私が自然科学と歴史学とは違ふと感じたことも、溺れる者は藁をも捉えたくないという私のたんなる幻想に過ぎないことであつたかも知れない。